

令和3年12月2日

根本正顕彰会会報 第98号

発行者 根本正顕彰会

「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て」

目 次

1 卷頭言 「コロナ禍の収束と経済の立て直しを願って」	会長 増子輝雄	1 頁
2 「根本正顕彰会」について	会員 細貝幸雄	2 頁
3 政治家根本正を支えた徳子夫人	理事 海老根敬	3 頁
4 資料報告 「根本正ゆかりの地を訪ねて」		4 頁
5 作成資料紹介 「根本正夫人徳子と矯風会活動」	元会員 斎藤郁子	18 頁
6 トピックス 那珂市立図書館 司書さんのおすすめ本「根本正物語」 (根本正生誕150周年記念)		29 頁
<編集後記>		30 頁

【お知らせ】

新型コロナ感染拡大に伴い、以下の2事業が中止となりました

- 1 根本正顕彰フェスティバル（中止）
—根本正生誕170周年記念—
五台地区まちづくり委員会との共催
- 2 根本正ゆかりの地を訪ねる旅（中止）
方面 = 山方宿・大子町・塙町方面
- 3 公民館まつり オンライン参加「根本正顕彰会ホームページ」を参照

コロナ禍の収束と経済の立て直しを願って

根本 正顕彰会

会長 増子輝雄

世紀の祭典として全国民が待ちに待った東京オリンピックは、世界中に拡大した新型コロナウイルスによって開催が1年間の延期となり、さらに本番を迎えた今年の夏は国の緊急事態宣言と重なり、無観客の中で実施されるという最悪の事態とも云われる大会となってしまいました。テレビ放送はあったものまことに残念でありました。オリンピックに関係された方々には大変厳しい環境の中で尽力され本当にご苦労様でした。この苦労がいつか報われることを願ってやみません。

さて、根本 正顕彰会も今年度は順調に諸事業が実施できるものと信じてスタートしたのですが、残念ながら前記のように一向に沈静化されず、昨年に続き諸事業が中止に追い込まれる事態となりまことに残念であります。

今回は本欄でこれらの経緯について若干ふれてみたいと思います。

前回の会報（会報第97号）の中でお知らせしましたが、本年度は根本 正生誕170周年を記念し、生誕地域が現在文教地域として形成発展されている現状を含めて、地区の歴史を学ぼうという事業を計画し、本顕彰会の山田正己副会長、共催予定の五台地区まちづくり委員会の山田甲一事務局長などが中心となって準備を進めて来ましたが、直前になって中止を余儀なくされることになってしまいました。

また、顕彰会事業の中で最も人気のある「根本 正ゆかりの地を訪ねる旅（日帰りバス旅行）」についても、昨年に続き中止となってしまいました。本会の海老根 敬理事をはじめとして担当役員を中心に水郡線沿線の奥久慈方面、福島県方面の歴史を学ぶ内容で計画し、準備して来ましたが中止の止む無きに至り誠に残念であります。両事業とも来年度に実施することで計画し、他の事業も含めて実現に向けしっかりと取組んで参りたいと思います。

コロナウイルス感染予防ワクチンの接種も多くの国民に行き渡り、秋に入つてからは政府の緊急事態宣言が解除されることとなり、明るい希望が持てるようになってきました。まだ予断は許されないとは思いますが少しづつ沈静化に向かっていることも事実であります。

一日も早い回復を願い、国家事業として経済の立て直しに全力で取組まれることを強く望む次第であります。

今後とも引き続き会員各位のご支援・ご協力をよろしくお願ひいたします

「根本正顕彰会」について

第1地区 副会長 細貝 幸雄

私は6年ほど前、先輩の民生・児童委員に勧められて「根本正顕彰会」に入会しました。以来、会長の増子輝雄様や役員の皆様方には大変お世話になりました、心から感謝いたしております。

「根本正顕彰会」の事業(公開講座・顕彰会フェスティバル・研修視察…等)は、毎年度定期的に企画運営され、その充実した内容には感嘆しております。さらに、事務局の方々のご尽力により「根本正顕彰会会報」が年3回ほど発行され、関係資料を添えて郵送してくださっています。7月には第97号をお送りいただきました。これらの会報や関係資料は貴重なものであり、ファイルに綴って保管しています。中には積ん読状態になっているものもありますが…。また、公開講座や研修視察等への案内をいただきながら欠席することも多く、会員とは名ばかりで努力不足を痛感しております。

「根本正」は東木倉出身の元衆議院議員で、郷土はもとより近代日本の発展に多大なる功績を残された先達であります。平成9年には、「偉大な先人、根本正を顕彰し、郷土愛を高め、生涯学習、文化・教育・福祉の向上に寄与することを目的とし、「根本正顕彰会」が設立されました。生誕150年に当たる平成13年には、顕彰会記念事業が展開されました。盛大な式典の開催や記念誌の発行に加え、顕彰碑が中央公民館前の向かい側に建立されました。その顕彰碑の撰文は以下の通りです。

根本正の生涯と業績
根本正(一八五一、一九三三)は那珂町東木倉に生まれ、明治四年二十歳で上京し、人力車を引くなどして学費をつくり啓蒙思想家中村正直に学んだ。
明治三十一年から大正十三年まで二十六年間、当地選出の衆議院議員として子供が平等に教育を受けられるよう学校の授業料を全廃させ、未成年者喫煙禁止法、未成年者飲酒禁止法の制定に全力を尽くした。
また、水郡線建設、東海村村松の砂防林植栽、利根川水防工事、つくば市高層気象観測所設置などを推進し地盤の発展と住民の福利向上に貢献した。
生誕百五十周年にあたり、すべての人間が大切にされる社会を求めて懸命に努力した根本正の精神と業績を後世に伝えるためこの碑を建立する。

平成十三年十月

撰文 橋村一郎
制作 篠原洋
根本正顕彰会建之



6月20日、中央公民館にて「根本正顕彰会」本年度第1回公開講座が開催され、久しぶりに出席してきました。講師は顕彰会理事(事務局長)で歴史民俗資料館館長の仲田昭一先生です。今回の公開講座は、「根本正 教育への情熱」と題した教育分野の業績等に焦点を当てての内容でした。手作りのレジュメ(A4_7枚)を配付いただき、1時間余の素晴らしい講話を拝聴することができました。

【講話の要旨】根本正の「教育への情熱」…その背景は? 出身から探り、勉学を志した契機や努力の足跡を辿る。より高い学問にふれたい、英語を学びたいとの思いで、東京へ。先進文化「マッチと時計」や中村正直「西国立志編」との出会い。26歳で念願の渡米。働きながら現地の小・中学校で学ぶ。38歳でバーモント大学を卒業。米国からの帰途、欧州各国を歴訪。米国の自由教育(小学校は無月謝で誰でも受けられる)を導入するために政治家を目指す。政界入りの目的は「自由教育の普及と鉄道の完成」と後に自身が語っている。板垣退助から勧誘を受け、政友会に入党。帝国議会衆議院議員選挙に3度目の立候補(47歳)で初当選。代議士としての初仕事が国民教育授業料全廃建議・可決。以後、小学校教育費国庫補助法案成立・未成年者喫煙禁止法案成立・未成年者飲酒禁止法案成立等に尽力。他に教育分野に係る建議・質問等は数え

切れず。子どもたちのため、国会で26年間に渡って奮闘した政治家である。

仲田先生の講話を拝聴し、あらためて「根本正」の偉大さに気づかされました。明治から大正期にかけて、これだけ「教育への情熱」を注いだ凄い政治家がいたことを、我が郷土の誇りとし、その精神や足跡を市民・県民はもとより、日本国中に広く伝えていくべきではないでしょうか。コロナ禍の今こそ…。

「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て(根本正)」

(『民児協だより那珂』第5号より転載)
令和3年8月1日

政治家 根本正を支えた徳子夫人

1867（慶應3年）4月17日、羽部専十郎の長女として誕生。1890（明治23年）女子学院卒業後、新潟県高田の同校分校で教鞭をとる。矯風会活動中に知り合い9月根本正と結婚。

1933（昭和8年）1月5日、根本正と死別。

1,943（昭和18年）11月30日死去、享年77歳。

1. 徳子夫人に影響を与えた母方の祖父。

桜 任蔵 1812（文化9年）～1,859（安政6年）47歳

勤王の志士、本名小松崎一雄（真金）

笠間藩、真壁医師の子、東京相良家より小松崎家養子になる。元真壁氏の臣。従四位、草莽の奇士。大日本史の製本に携わる。藤田東湖の門下生、後に江戸に遊学。

幕府の小普請方物書役に就任した。頼三樹三郎、西郷隆盛、吉田松陰とも親交があった。安政の大獄ではお尋ね者となるが、水戸藩に対して同情的であった会津藩は桜任蔵を匿ったと言われている。

後に活動を西国に移し、土浦藩領八郷生まれ、勤王の志士、万葉歌人、大阪坐摩（いかすり）神社神官、佐久良東雄と交わった。（安政の大獄、江戸の小伝馬町で獄死）大阪、高松、津山潜行中に鳥取で桜田門外の変の首謀者関鉄之介とあう。安政6年に大阪で病没。

尊王論者高山彦九郎に心酔、水戸学に裏打ちされた尊王攘夷思想を実践した人。

2. 羽部家 戦国時代 佐竹義重の家臣。元武田氏の牢人。

幕末は太田の庄屋水戸藩の郷士。一族には天狗党穩健派（大発勢）で獄死した。

羽部廉造（58歳） 1864（元治元年）10月23日

柳原勢は那珂湊の戦いのあと幕府軍並びに諸生派の策謀で投降し、同勢1154名全員が罪人として関東22藩の大名家にお預けとなった。川越藩に230名預けられ獄死19名広濟寺に埋葬された。{参考 水戸殉難者鎮魂人名録}

徳子夫人は根本正伝によると羽部専十郎の長女とあるが、水戸歴史を学ぶ会代表斉藤郁子氏によると、母は豊田天功の門人小川忠次郎に嫁し徳子誕生とある。

令和3年度根本 正ゆかりの地を訪ねる旅実施計画（案）

1. 期日 令和3年9月26日（日）
2. テーマ 水郡線沿線関係史跡めぐり
3. 交通 大型貸切バス（奥久慈交通）
4. 行き先 福島県塙町、大子町、常陸大宮市（旧山方町）方面
5. 集合発着 那珂市中央公民館前午前8時20分集合
6. 見学先及び予定時間

区分及び見学先等	予定時間
1. 出発（那珂市中央公民館前）	AM 8:30
2. 道の駅「かわプラザ」（常陸大宮市）	AM 9:15～9:30 (15分)
3. 塙町～道の駅塙、向ヶ岡公園水郡鐵道完成記念碑、田中愿藏刑場跡碑（福島県）	AM 10:30～11:30 (60分)
4. ※昼食（大子町 やみぞ）	AM 12:00～12:45 (45分)
5. 大子駅前～根本 正胸像 十二所神社胸像跡	PM 12:55～14:00 (65分)
6. 常陸大宮市（旧山方町） 山方城跡（御城展望台） 常安寺（五輪の塔、大串無事衛門墓） 山方宿駅（根本 正演説）	PM 14:30～16:20 (110分)
7. 帰着（那珂市中央公民館前）	PM 17:00

参加費 4,000円（昼食代等含む）

※ 今後の推進計画

- (1) 参加者募集の諸手続き（会員にハガキにより案内）
- (2) 見学先等の関連資料収集
- (3) 見学先、車内の説明等の諸準備
- (4) その他

水郡鐵道完成記念碑

福島縣白川地方ハ古來兩羽及ビ越後ヨリ常陸水戸ヲ經テ江戸ニ至ル孔道ニシテ上地肥沃
交通頻繁加フルニ農産林産及ビ鑽物ニ富メル地ナリ 然ルニ維新以來明治ノ中葉時代ニ
全ルモ交通機關ハ僅ニ中央ヲ貫通スル東北本線ト東海岸ニ沿ヘル常磐線トアルノミニ止
マリ縣南地方ハ文化ノ惠澤ニ浴スルコト能ハザルモノ茲ニ歲アリ 白石禎美君深ノ之ヲ
概シ當時北海道選出代議士白石義郎君ト晉議リ自ラ進テ身ヲ政黨ニ投シ東北本線ト海岸
線トヲ聯絡スル白河高萩間ノ横断線ヲ縣南地方ニ求メ其ノ先鞭ヲ著ケンコトヲ企テタリ
而シテ君等ノ計畫ハ時機未ダ熟セサルヲ以テ空シク蹉趺ニ帰シタリ
君等ノ堅忍不拔ナル失敗ノ為ニ其志ヲ屈スルモノニアラズ 君等ハ更ニ白河高萩間ノ横
断線ニ換フルニ白河水戸間ヲ聯絡スル終断線ヲ以テシ茨城縣選出代議士根本正君等ト與
ニ政府當路者ノ間ニ奔走スル所アリ 其後之ヲ水郡線ト改称シ極力之ガ實現運動ヲ繼續
シタリ 而シテ君等ノ提出シタル水郡鐵道建設案ハ明治四十五年三月六日ヲ以テ帝國議
會ヲ通過セシカ爾未幾多ノ波瀾曲折ヲ經大正十年六月始メテ該鐵道起工式ヲ舉ゲ翌年第
一期工程ヲ竣リ令茲十二月全線ノ完成ヲ見ルニ至ルマデ幾ンド十有四年ヲ閱シタリ
顧フニ該鐵道計畫以来前後二十有八年 苦心經營ノ結果國家事業トシテ終ニ能ク多年ノ
懸案ヲ解決スルヲ得タルモノ畢竟君等ガ地方ノ資源開發ト國利民福ノ増進トヲ以テ己レ
ノ任ト為シ至誠一貫其ノ終始ヲ全ウシタル功ニ帰セザルヲ得ズ 頃者該鐵道完成ノ域ニ
際シ有志ノ士兩君ノ功績ヲ追念シテ己マズ 碑ヲ建テ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲シ之ガ文ヲ
予ニ嘱ス予其舉ノ世道人心ニ裨益スル所少小ナラザルモノアルヲ嘉シ乃チ其ノ梗槩ヲ叙
シ之ヲ石ニ鐫ラシム

昭和九年八月下旬

白蘇雲峰 德富猪貞次郎撰

(碑念記成完道鐵郡水)

(内園公岡ケ向・塙村豊常郡川白東縣島福)



町指定史跡

向ヶ岡公園

塙町指定 昭和51年9月21日

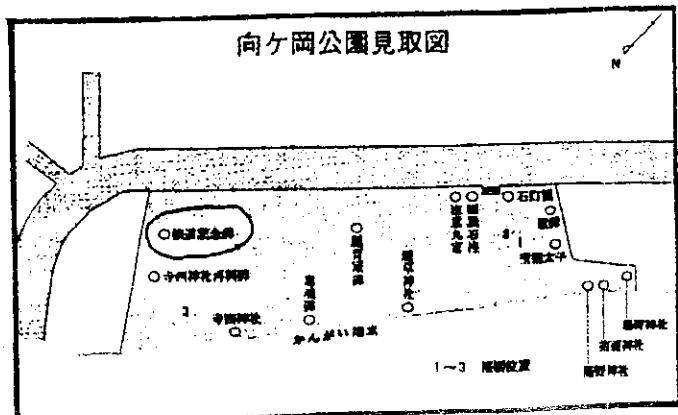
所在地 大字塙字川向道上104

公園とはいって、現有面積約818平方メートル程で、外部は石垣によって境界を限られてある。これは、県指定天然記念物の枝垂桜保護のため整備されたもので、故金沢春友翁の尽力によるもの、南側に県道が開かれた明治18年以前は九ツ山への山続きの岡であった。

この公園は規模こそ小さいが、寺西代官によって、庶民のいこいの場として造られたもの。時に寛政5年（1793）であり、本邦の庶民公園の鼻祖と云うべきものである。

園内には、文政2年寺西代官の最たる治績を後世に遺す誕育家がある。

熊野社があるため、別名熊の森公園という。向ヶ岡とは、塙陣屋から見て名づけたものと、先師は云っている。



7 水郡線敷設運動

太田鉄道は明治 26 (1893) 年に創業され、明治 32 (1899) 年に水戸～太田間の全線が開通します。しかし、明治 34 (1901) 年に営業不振のため水戸鉄道に譲渡されました。

一方、明治 36 (1903) 年に福島県白川郡笛原村会議員白石禎美が白萩線（白河～高萩）を計画して單身で実地踏査をします。その後、鉄道院が平郡線（平～郡山）を決定する一方で、白石禎美は白水線（白河～水戸）を計画し、叔父で北海道選出の衆議院議員白石義郎および茨城県選出の正（両者とも政友会議員）に建設計画推進を依頼しました。その後の水郡線全線開通までの経緯は以下の通りです。

明治 44(1911) 年	根本・白石両代議士等提出の白水線建議案議決 9月 14 日 鉄道院建設課長石丸重美が沿線実地踏査
大正 4(1915) 年	11月 憲政会内閣誕生、水戸・郡山鉄道建設案否決 12月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設申請
大正 5(1916) 年	3月 上菅谷～大宮間の私設鉄道敷設許可
大正 6(1917) 年	3月 政友会内閣が復活 6月 水戸鉄道が上菅谷～大宮間鉄道建設工事開始
大正 7(1918) 年	水郡鉄道は大郡鉄道（大宮～郡山間）として可決
大正 11(1922) 年	12月 10 日 山方宿まで開通
昭和 2(1927) 年	3月 10 日 大子駅開設 12月 1 日 鉄道省が水戸鉄道を買収し、水郡線と改称
昭和 5(1930) 年	12月 大子町有志が根本正胸像を十二所神社境内に建立
昭和 9(1934) 年	12月 4 日 水郡線全線開通
昭和 43(1968) 年	11月 大子駅開通 40 周年記念に根本正胸像を駅前に再建

大正 11 (1922) 年 12 月 10 日の山方宿駅開設記念式での正の祝辞は、水郡線敷設に向けた情熱と喜び、関係者への感謝の念がみごとに表現されたものでした。

(以下その一部分)

本線開通式に至りたるは、国力発展のために祝せざるを得ず。殊に茨城、福島両県の実力発展を増進すること大なりといふべし。この幸福を得るに至らしめたる



(大子の胸像前で演説する正：根本喜代泰氏提供)

所のものは、鉄道国有の法律あるが故なり。

ここに第一に感謝すべきは、この鉄道国有を主張せし板垣退助君なり。したかわらひすけ 第二に感謝すべきは、はらたかし 軽便鉄道法を成立させた原敬君なり。第三に感謝すべきは明治44年建議の当時、建設部の重職にありたる今の鉄道次官石丸博士なり。石丸君は建議案通過の結果、直に水郡線調査のため出張せられたり。ここに石丸君がいかにその職務に忠実、かつ献身犠牲の仁たるをしょうめいするに足る。君が水戸駅前太平館より線路踏査として出立の日は雨降りなりし。君は早朝人力車に乗車、出立の際、雨降りなれば車の幌をかけたる方然るべしと余は車夫に注意したるに対し、石丸君曰く、道中四方の実況を観察することなれば、いかなる大雨といえども幌をかけるに及ばずと。

正は、この他にも地域へ貢献した施策があります。それらは災害の未然防止として高層気象観測所の設置や横利根閘門の建設、村松海岸砂防林の造成などです。いずれも住民の平穏な生活を実現しようとしたものでした。(ゴシック強調は編者)

8 おわりに

士分と農民との身分差を痛感していた正にとって、個人的には身分制度を無くし「平等」を実現することは悲願でした。また、幕末における水戸藩内の激しい争いを体験した正にとって、いわゆる「平和」の尊厳を実現しなければならないとも痛感していました。それはやがて、『政見』(大正6年発行)の中にある「国際協調外交してはら (いわゆる幣原外交)への賛意」となって表されました。その実現には種々の問題もありましたが、根底には「世界の諸民族は平等である」との考えがあり、それ故に互いの独立を認め合わなければならぬとの信念がありました。

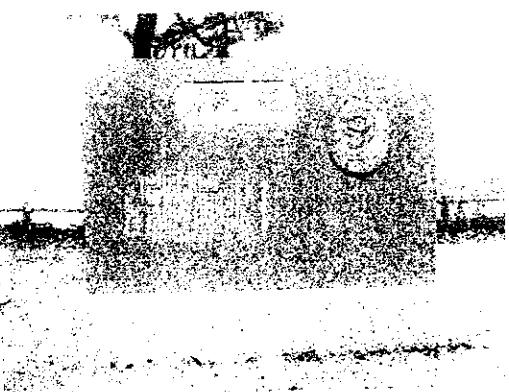
世界的視野を持った国家観、健全な国民の育成という大所高所からの施策を提言すると同時に、地元の発展・繁栄を期した施策の実践に努めた理想的な政治家であったといえましょう。

墓所は、東京青山墓地と生誕地那珂市東木倉の根本家の墓所にあります。

平成13(2001)年には那珂市役所前にある一の関ため池親水公園に根本正顕彰会により顕彰碑が建てられました。



(根本家墓所の正・美倫父子の墓)



(根本正顕彰会によって建てられた顕彰碑)

ほほの歴史通信

「根本正胸像」の台座

本町の百段階段をあがり詰めた左側（だいご小学校校庭の一偶）に、胸像のない根本正の台座がある。胸像は、大東亜戦争時、兵器製造のため「金属回収令」により回収され、台座が残された。台座は、礎石、塔柱、笠石からなり、笠石と礎石は八溝石、塔柱の石は押川の西方宇津保沢から採石した自然石を利用来して造立されている。根本正の顕彰にふさわしい郷土の資源を利用した重量感のある記念碑である。

根本正は、那珂町（現那珂市）東木倉の生まれ、明治十三年（一八八〇）から一十六年間衆議院議員を務め、未成年の禁酒禁煙、義務教育無償化、水郡線の全面開通に尽力した人である。明治四十四年（一九一一年）、第二十七国会に根本正代議士や福島県塙町白石楨美らによつて水郡線敷設案が提案された。水郡鉄道が国会を通過して建設されるまでは、紆余曲折があつたが、大正九年（一九二〇年）原敬内閣の時予算案が成立し、大郡線として工事を開始、大正十一年常陸大宮—山方宿間、大正十四年山方宿—上小川間、昭和二年上小川—常陸大子間が開通した（注：同年十二月水郡線と改称）。

昭和三年石井栄次郎（大子）、神永秀介（佐原）らを中心にして、根本正胸像建設の話を持ち上がり、昭和四年に根本正胸像建設会が設立され、昭和五年（一九三〇年）一〇月に胸像が建立された。胸像については、当時の彫刻家の大家・大熊宏氏に鋳



建立時の胸像



現在残っている台座

造を依頼。大熊氏は靖国神社の大村益次郎銅像の制作者としても知られた彫刻家である。（注：大村益次郎は蘭学、西洋兵学者。明治政府の兵制の大改革に当たった）

碑の正面に、当時の鉄道大臣元田肇の漢詩が刻まれてある。

水郡鉄道正全通　百貨輸來一瞬中　山溪到處入春風

料識吾兄帶微笑

碑の右側には、根本代議士自筆の和歌が刻まれてある。

國の為鉄をもとかす真心に

なぞならざらむくろがねの道

胸像の右側には、記念碑建設に関わった役員名、各町村別委員名、水郡鉄道記念碑寄付者の芳名を刻んだ石塔が建立されている。記念碑建設に関わった役員、委員は、次の人たちである。

（記念碑建設役員）

・總裁 神永 秀介	・副会長 外池太一郎
・会長 石井栄次郎	・会計 菊池信太郎
・顧問 石井鉄太郎	

（各町村委員）

○大子 小崎 優平	川口 利吉	川口 利作	大藤 保
○佐原 上川 永瀬三四郎	黒崎甲四郎	野内 成一	益子有造
○依宮 田川 松浦重太郎	皆吉 賛	益子善治衛門	
○上小川 黒沢 吉成	吉成 俊夫	菊池 雅雄	
○袋田 沢村 紀一	松本 元永	齊藤勇之介	
○下小川 神永道之助	小室順太郎	○生瀬 石井 善蔵	
○上小川 石井利之介	川井 謙吉	○生瀬 石井 善蔵	
○下小川 神永道之助	小室順太郎	○諸富野 三次 進	

建設地としては、大子駅前広場が予定されたが、鉄道省の許可がおりないため、第二の候補地である十二所神社前の駅を見下ろせる現在の高台の地が選ばれた。

（小澤）

水郡線常陸大子駅前広場の中央に、駅舎を背にしてプロンズの胸像がある。これが根本正の像である。

根本正は、嘉永四年（一八五一年）、那珂郡東木倉村に生まれ、明治十一年（一八七九年）、二十九歳の時渡米、苦学して、バーモント大学を卒業、キリスト教と合理主義の精神を身につけ、明治二十三年に帰国した。根本は、政治家を志し、二十三年、二十七年の落選の後、三十一年に当選、以来大正十三年（一九三四年）まで二十六年間衆議院議員として活躍する。

明治二十二年に「国民教育授業料全廃の建議案」を議会に提出、可決。どんな子供でも教育を受けさせるようにしなければならないと、近代日本の教育発展に貢献した。小学生の教育費が国庫の補助を受ける以上、その小学生

がタバコを吸い、酒を飲むことは健康に害があると、明治三十二年に「未成年者喫煙禁止法案」を議会に提出、可決。「未成年者飲酒禁止法」は、二十三年間を費やして大正十一年に可決した。

水郡線建設については明治四十四年建議案を議会に提出するが難航し、国の事業として決定するまで、実に十年間を費やした。

なぜ、根本正は、水郡線建設に情熱を燃やし続けたのであらうか。

建議書には、鉄道により、大子地方の葉タバコ、コンニャク、大麦、和紙など農産物の輸送をはじめ、八溝山一帯を中心に出す木材、木炭、薪などの輸送が可能になり、商工業の発展に利する、ときわめて大きいと述べる。

現在は車社会で、高速道路が人間生活の動脈的働きをして、その当時は鉄道がそれに代わるものであつた。これを当初から国有として建議したのは、私設資本にまかせる限り、片田舎のあまりかえりみられない所は、いつまでたつても建設をみず、發展をみないという不合理に対たいする、根本の「神はかなよらず」という信念であった。

太田線の水戸太田間（一九・六キロ）は明治三十二年四月に開通しているが、山間地帯でトンネルや橋を多くつくらなければならぬ曲りくねった水郡線は難工事の連続であつた。上管谷宿は大正七年、大正十一年に山方宿まで、大正十四年に上小川まで、昭

和二年三月に水戸大子間（五五・六キロ）が開通する。

当時、大子の地に汽車が走るなどはおよそ夢想だにもしなかつた。

南は太田、西は西那須から氏家どこに出来るにも大変だった。この山奥の町に汽車が走るというのだから土地の人にとって、その驚きと感激は大変なものであつたという。

昭和五年に大子東館間が開通、茨城県内での全線開通を記念して根本の胸像を手一所神社境内（現大子小学校校庭）に建立する。

碑文には、根本の「國の為め 鉄をもどかす真心に なそなじぎらん クロガネの道」の歌が刻まれている。

昭和八年（一九三三年）、八十三歳で根本が死去するが、その翌年、昭和九年に水戸郡山間（一四二・三キロ）の全線が開通する。鉄道の開通は、大子地方と、東京をはじめ水戸、郡山などの各都市との結びつきを深め、各駅では、背後の森林や農産物と結びついで、大子地方發展の要因となつた。

胸像は太平洋戦争中の金属回収によつて姿を消すが、昭和四十二年に大子駅開通四十周年を記念して再建（常陸大子駅前）された。碑文に、「國を憂い郷土を愛した先生の英姿を万人の仰ぎ得ることとなつた。・先生の高徳偉業と後世の人士の報恩の至誠を永遠に伝えることとした」と刻まれている。



▲JR常陸大子駅前ロータリーに立つ根本正の胸像
(平成11年6月21日撮影)

(回) 西金駅の開設

大正八年に水戸から大宮まで、汽車が通るようになつた。やがて奥久慈を縦貫して郡山まで開通すると決まつた時、沿線の人々は狂喜して躍り上り、明るい気分になつた。大正一〇年(一九二一)いよいよ大宮以北の実地測量が開始された。最初の予定駅は、山方宿駅から上、下小川駅、袋田駅、太子駅で、路線が西金に入つてから小学校裏坊屋敷から西金宿の上の畠を通り新畠口駅が設けられることになつた。ところが測量の結果は、盛金の川原の真中(当時)に下小川駅ができるて次の駅は現在の上小川駅と決まり、西金は素通りになるとわかつたのは、この年の一〇月であった。夢にも思わなかつたこの変更に、西金の区民は色を失つてしまつた。幾度か区民の会合を開いた結果、西金宿、寄居、橋下、湯沢、それに上小川村の川下、新畠の住民たちは一致団結し、西金駅の設置を目指し一齊に立ち上つたのである。早くから鉄道の誘致に努力していた神長道之介、小野瀬英、村長小室隆を中心に、村の有志、壮青年団代表は、幾回となく上京し倦むことなく鉄道当局に陳情したが、わずか四里の短区間に新駅を設置することは絶望に近かつた。そこで更に石井三郎代議士(久米村)同じく水郡線建設に尽力した根本正代議士(後台村)、大津淳一郎貴族院議員(高萩市)に依頼して猛運動を続け、ついに大正二年七月三日西金駅増設が承認された。しかし駅の指定場所は狭隘なので、県道を付け替えなければならなくななり、畠二四歩、田七畝一五歩を買収し、県の許可を受けて県道の付け替工事を行なつた。この工事には西金及び盛金の大内野、上原、黒丸、上小川村の新畠、川下、諸富野村の北富田の各地区民が縦出で手弁当で労力奉仕をした。この時の労力奉仕者数と寄付金は次のとおりであつた。

労力奉仕者	西金区民	一五〇戸	二六六二人
	他村		二九四人
寄附金	西金		三三〇〇円
	他村		一四八円

このようにして西金駅は大正二五年(一九三六)二月二一日開通したのである。区民の喜びは筆舌に尽くせないものであつた。この日は、空前の多彩な催しでにぎわつた。この不退転の事業を記念するため昭和三六年九月「感謝之碑」が西金駅前に建てられた。その碑文は次のとおりである。(略)

（略）山本町

大約一四〇隊面五十四回忌法事記念詩

「田中隊隊長 田中愚藏を偲ぶ」

生きては忠義の

人となり

死しては忠義の

鬼となる

田中愚藏自筆

(処刑された後、懐中から発見された)

(高野安樂寺作成)

田中愚藏の「信念」と「勇氣ある決断」

田中愚藏は弘化元年（一八四四年）常陸太田市水府町の猿田玄碩の次男として生まれ、愚藏二才の時、水戸の下屋敷に移る。父は水戸藩主徳川斉昭に見出されて藩医として仕えた。六才の時、原忠寧が主催する薈義塾に入る。のちに水戸弘道館で学び、さらに江戸の昌平坂学問所（のち東京大学となる）で儒学者安井息軒に師事し、儒学・兵学などを学んだ。その時の学友が藤田小四郎で勉学を共にした。のちの天狗党挙兵の仲間となる。

一八六二年、水戸藩主徳川慶篤に随伴して上洛（京都）、京にいては時局の勉学に奔走し、單学に深い備前（岡山県）の藤本鉄石の門下に入つて学んでいた。藤本はのち倒幕の先駆者として天誅組の変（一八六四）に参加、大和の五条代官を襲撃したが、失敗戦死した。

田中愚藏は十九才にして帰郷、安井息軒の推薦により時雍館（野口郷校）の館長となり子弟教育に努力精進した。一八六四年、水戸天狗党の筑波山挙兵に藤田小四郎と共に参加した。田中愚藏は奇兵隊長として單資金調達に貢献した。（当時の水戸藩は諸生党。天狗党の内紛、幕府の内政干渉の強化により混乱の極みにあつた。）

天狗党は日光に出向き、日光にほど近い太平山に陣を置いた。そこで、田丸総帥は天狗党が挙兵した大義名分の施政方針を発表した。その綱領の骨格をなすものは「尊皇攘夷と敬幕」という水戸学の理念そのもの「天皇を尊び、幕府を敬う」の内容に終始し、挙兵にはあいまいな声明だつた。

徳川幕府を倒すという倒幕の精神はみられず、同志の中から反対攻撃する声が起り始めた。今まですべてに寡黙を守つてきた田中愚藏は藤田小四郎の水戸に戻る提案に敢然と反論した。
 「先君烈公の御遺志を奉体し、大義を唱え、天下に魁けて義旗をあげ、檄を四方にとばして換氣して参つたではないか、しかしかるに、家族の安危が気にかかり、陣をはらつて水戸へ帰れれなどとは笑止千万。我等は、草鞋の紐を結んだ時から親兄弟妻子と別れ、家を捨て、我が身を草むらの露に果てる覚悟で参じてゐるもの、素願眞徹のためには尚一層の力を合わせ、進んで倒幕の道をひらくねばならん」と、田中愚藏は心にたまつていしたものの一氣にはきだした。何が挙兵の目的かと激しく詰め寄りあくまで倒幕を主張した。公の場において、誰もが口外したことのない「倒幕」という言葉、藤田小四郎は、「倒幕などとは名分にもどる暴論であり、幕府を蔑ろにするものである賊徒の方便よりお粗末なことだ」と、怒つた。尊皇敬幕の田丸。

藤田らとの間に激しい論争があつた。論争は『尊皇敬壽』と『尊皇倒幕』の天狗党を二分する決定的な要因となつた。一千名余の兵馬と武器を備えて幕府に立ち向かう以上、それは完全なる謀反であり、それでもなおかつ幕府を敵い、深く恭順いたしますといふのではあまりにも矛盾した論理であり、大義とは名ばかりで、不徹底極まる筑波山挙兵といわざるを得ない。田丸の筑波勢と決別した田中愿蔵は、同志三百余名と別行動をとつてゐた。田中愿蔵は一隊を率いて、各地で『尊皇倒幕』を呼び掛け遊説をつづけた。

幕府では、天狗党は謀反の氣ありと、水戸藩への内政干渉を強化、若年寄田沼玄蕃頭意尊が総指揮を執り、幕命により天狗党の取締りを強化した。北関東・南東北の各大名に領内において軍資金等の調達に協力しない追討令を出した。そのために天狗党も田中隊も軍資金調達に深刻で、いろいろな問題が生じた。田中隊に加盟するには頭髪をばつさり切り落とし、その髪を束ね決意をした。今までの武士のしきたりになかつた自由奔放な風体から田中隊は断髪隊又は『サンギリ組』と呼ばれた。奔見方によれば、「四民平等の理念」とも言えよう。旗本武士の尊皇倒幕』・『四民平等』の実現に共鳴して入隊をしてくる若者が後をたたず、田中隊の人数は増大した。(サンギリ頭は長州藩の高杉晋作が組織した奇兵隊と同様に)世直し的な要因。

田中隊は軍資金調達に苦労しながら筑波町に宿営し、火事の真実を田丸総帥の使者に説明、犯人が次の間に控えているので、貴殿から直接詰問くださいと勧めている。これが柄木の火事の真実であることを強調した。のち田丸の筑波勢から「烈公の神位を護持している我等こそ、天狗党の本隊であり、田中愿蔵が如きは諸国浪徒の集団であつて我等筑波の本隊とは一切関係のないことがある。」と、田丸の筑波勢からこの流布され、近隣の役人や豪商の中には、田中隊を無視したり、村々では自警团を組織して立ち向かつてくる始末となつた。田中隊は野口村に本陣を置き、しばらく滞陣することにした。野口村では名主はじめ村ごとあげて田中隊をもてなしてくれたのも館長時代に培つた田中愿蔵の人情にあふれた人徳施政のなすところであり、村の人たちは、危険を承知で田中隊の一一行を受け入れてくれたのである。田中愿蔵は野口村に滞陣中は、本隊を參謀の土田と今瀬に任せ、西に東に馬を飛ばして時局の把握に走つた。江戸、或いは、横濱騒乱の元凶である横浜まで足をのばして夷人の村を密かに偵察したともいわれている。

田中愿蔵が野口村に戻つてみると、意外な報せが待つていた。田丸総帥は、天狗党より田中愿蔵を除名処分にする旨を発表した。筑波勢からの除名を知った田中愿蔵は動搖もしなかつた。田中

隊の士氣をますます鼓舞し『倒幕あるのみ、我等はその栄光の先鞭たらんとなるものである大義の先兵となつて倒れることはもとより本望である』と潔よかつた。筑波勢は「放火、掠奪、金穀を押借し、人心を乱して恐怖におどしいれ、乱暴の限りをはたらいているのは田中愚藏率いる乱暴者たちである。我等筑波勢はわざかの難題も行なつていない。自日のもとに潔白である。」と、一方的に大いなる宣伝を行ひ、田中愚藏をして、まだ倒幕運動は本格化しておらず尊皇攘夷運動が盛んで、一八六四年上旬、第一次長州征伐で幕府が勝利し、幕府の権力を西国諸藩に見せ付けた、このような時、どこよりも先に、天誅組・但馬生野の二の舞にならないために、もつと兵馬を固め、武器を備えて堂々と幕府に見参すべきと倒幕を訴えた。

倒幕運動は一八六七年に薩摩・長州等により本格化するが、関東・東北は幕府の影響力が強固であり、水戸藩は御三家で十五代将軍慶喜の出、水戸学の本家であることから倒幕運動などは危険視され受け入れられなかつた。しかし、田中愚藏等の倒幕運動は時期尚早だつたが、この運動が三年後に実現し、明治維新建国に大きな影響を与えたことは事実である。

維新政府が会津戦争の際、棚倉に本陣を置いて総指揮官をとつた板垣退助は棚倉に入る前に、壇の向ヶ岡公園に数百人の兵隊を整列させ、田中愚藏等の墓に最敬礼し、倒幕運動を讃え、棚倉へむかつた。板垣退助は棚倉の陣に居る間、再三田中愚藏等の眠る安樂寺の墓に墓参に来たと記されている。

田丸の筑波勢の中には、諸生党・幕府追討軍と激しい戦いが展開される中で、太平山での大論争事件で、田中愚藏が「諸生党などに目を向けていいるとき時ではない。小異を捨て、今こそ幕府に立ち向かう好機到来である」と主張したことが、筑波勢に戻つた人々に中に、今にして反省してみれば、やはり田中さんとの言われたことがまさに正道であり、天狗党挙兵の本懐であることを痛感した。大義に向つて突進する田中愚藏の信念に敬服した。のち、筑波勢から数百人が分裂することとなつた。筑波勢にとつては大きな痛手となり氣勢をそがれた。

幕府追討軍総指揮官田沼は関東・東北の諸大名に天狗党壊滅を命じた。水戸城攻防をめぐつて諸生党・天狗党の対立の激化、國中は東も西も騒乱の渦中にあり、幕府としても極めて困難な状況にあつた。天狗党も追討が激しくなり、各地で戦いが繰り広げられた。十月那珂湊に追い詰められ、「今、諸生党・幕府追討軍と戦つて全滅するより、西上して京都いる一橋慶喜公に我等の真意を訴えよう」と提案した藤田小四郎に従い、那珂湊を荒々しく脱出した。

その頃、田中隊一行は諸生党と天狗党の権力争いを偵察しな

御城（みじょう）

1 どこに

国道118号の山方バイパスを北上すると右手に久慈の清流、正面に城郭らしきものが見えてくる。御城展望台である。このトンネル上の高台が御城である。旧山方町山方の北端にあたる。

御城展望台は、昭和63年に作られ、山方氏の分家子孫寄託の史料等も展示されている。

2 どんな

下の「高館、御城址略図」を見ると、東から西へ本城、中城、外城の三郭が並び土塁と空濠が巡らされ、北、東、南は崖に囲まれている自然の要害の城址である。水戸城を連想させられる。大きな違いは、外城の空濠を挟んだすぐ西に陥落な高館山が控えていることだ。この高館山にも土塁、空濠が構築されている。城主は本城、中城に住み、家臣達は外城、下級武士は南崖下の根古屋に住まいした。

根古屋前の皆沢川に嘆願橋が架かっている。一般人はここから中には入れず、嘆願等は橋の手前で役人に取り次ぎを頼んだ。

3 だれが・いつ

最初に、だれが・いつ構築したかは定かではないが、佐竹氏の勢力拡張と領土保全のための出城として重要な地であったことは間違いないだろう。

地名が山方であることからしても、応永年間から慶長7年の佐竹氏秋田移封までの約200年の大部分を山方氏7代が御城の館主であったことの意味は大きい。大部分というのは、山入の乱対策で主君筋の東政義が一時御城に入ったためである。山方氏が一族を挙げて秋田に移り、水戸徳川氏の就封と同時にこの御城は廃された。

4 山方氏について

関東管領家上杉の一族で、憲利の時、美濃国山方郡を領し初めて山方氏を称した。その子盛利は、ある殺戮後、上杉憲定にかくまわれていた。

その憲定の子である上杉竜保丸（義憲）が、太田の佐竹義盛の養子となり常陸に下向した。その際、山方盛利が義憲の傅役・後見人として太田に来て佐竹の重臣に加わり、御城の館主に封ぜられた。常陸国山方における山方氏は、この盛利を初代とし、俊則、俊治、国利、定利、篤定、重泰まで代々能登守を称し佐竹宗家のために忠勤を励んだ。

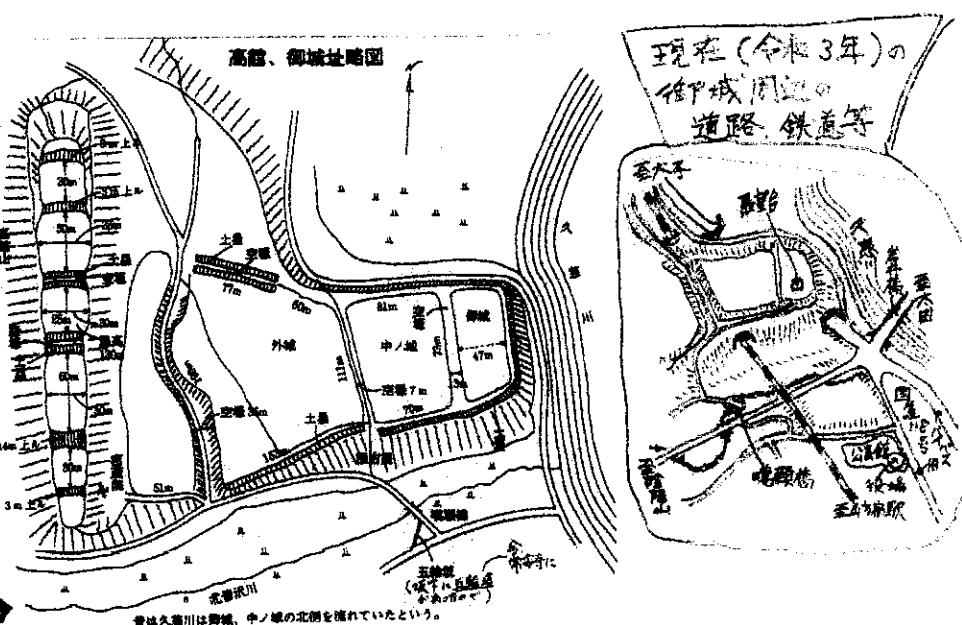
5 他に 南郷街道 国道118号 山方の宿 山方バイパス 水郡線 陰陽神社

嘆願橋を過ぎ、御城への登り道の傍らに南郷街道の小さな案内板がある。南郷街道は、山方町の役場・中央公民館のところで西に折れ、嘆願橋を渡り中城と外城の間を抜け北の崖を下り北上している。大子方面への主要な通りだった。その後、御城の東、北の崖の中腹を巡るような新しい道が整備されると、嘆願橋経由のルートはさびれた。新しい道の名残として、新上町・新道の集落名が残る。山方宿駅、役場、御城東と北進するこの道路、当時の国道118号沿いが、旧山方村・山方町の中心街であった。昭和終期に、山方バイパス・トンネルができると、かつての賑わいは今は昔となった。

水郡線が城址の下をくぐってまもなく100年になる。

光圀公ゆかりの陰陽山・陰陽神社には、日を改めてぜひ訪れて欲しい。

『山方町誌(上巻)』(昭51.9)→



鹿島清秀五輪塔

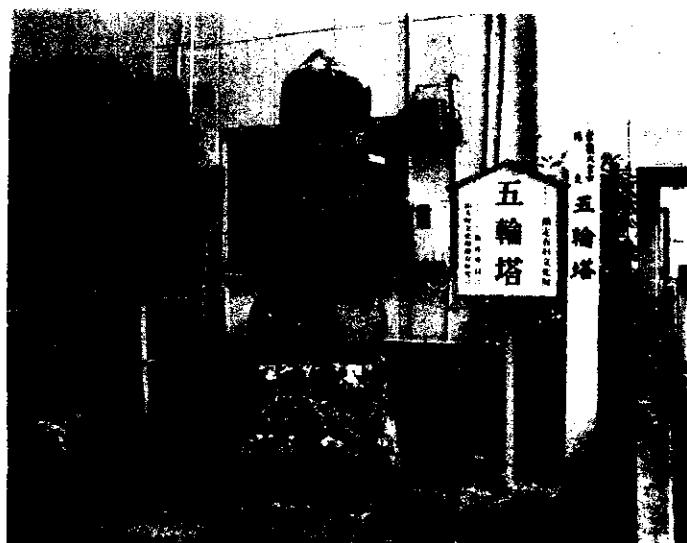
大平山白馬院常安寺（曹洞宗）の北側の道路から嘆願橋に下る坂道を五輪坂といい、その角にかつて五輪塔があったが水郡線建設により大正11～12年（1922～23）に現在地の常安寺入り口に移された。高さ2メートルもある巨大なもので、常陸大宮市の有形文化財となっている。これは鹿島清房の墓となっているが、正しくは鹿島清秀である。

天正19年2月頃に常陸佐竹氏が鹿島、行方2郡の領主たちを太田城に招いて佐竹氏の兵によって殺害した南方三十三館謀殺事件である。鹿島清秀は大正17年（1589）に鹿島神宮大惣行事職となり鹿島城主であったが、この事件後鹿島城も攻撃されて落城している。その後、近世に入り鹿島家は再興されておりこの地で殺害された供養のため五輪塔が建てられました。

大串無事衛門の墓碑

17世紀中頃山方町に生まれ育ち幼少のころから父母をうやまいた学問にもはげみました。年老いた母が快適に暮らせるように季節によって寝床を変え歩行の際には必ず付き添い神社仏閣や親戚へ行きたいと言う時には夫婦で仕事を休んで母の意に沿うように心を碎いたといいます。

江戸時代は下位の者が上位の者を敬い上位の者は下位の者を慈しむ儒教の教えが広められていました。模範的な農民像として称賛され他の農民にも理想として示されました。



鹿島清秀五輪塔



大串無事衛門墓

根本徳子と矯風会活動

はじめに

根本徳子は、日本の女性のために大切な役割をしていながらも、目立った活動ではなかったために、注目される存在ではありませんでした。婦人矯風会が出来たのは、徳子が桜井女学校に在学中の19歳の時でしたが、幼い頃から、矢島楫子や女性宣教師たち、小崎千代（同住所）らと生活を共にした彼女にとって、矯風会の活動に参加し奉仕することはごく自然のことでした。アメリカから伝道を目的として来た女性宣教師ミセス・ツルーに出会い、その精力的な活動と共にしながらも、自分にできる慈善事業を日課とした青春時代を過ごしました。



若き日の徳

〈徳子の学んだ桜井女学校〉

徳子は、東京都最古の女学校を誇る「女子学院」で学びました。

当時の名称は、「桜井女学校」といい、明治9年（1876）に桜井ちかが寝食を忘れて日本人による日本の子のために築いた学校でした。明治14年（1881）8月、創立者の桜井ちかは夫と北海道へ伝道のため旅立ちました。9月になると、矢島楫子が校長代行となり、女性宣教師のミセス・ツルーとミス・デビスが先生となり、その後を受けつぎました。この時、たくさんの生徒が入学してきましたが、その中に14歳の小川とくもいました。先生方の子供たちも一緒でしたので、学校というよりも大きな家庭のような雰囲気がありました。校舎は中6番町28番地と52番地に構えていました。2階は教師の住まい及び寄宿生の部屋、階下は講堂、教室となり一部は会堂ともなる小さな建物でした。多くの英語志望者のため、教室はどれも満室で、14歳くらいの少女から40歳前後の婦人までいました。午前中は28番地に住む上級の人々が英語の授業を担当しました。本校には、高等科と称する上級生が52番生とは別待遇で、西洋の先生方と一つ屋根の下に暮らしてて、名前を聞いても覚えられないような英語の本を小脇に抱え、解らないような難しい事を英語で話していました。自分たちと同じ人間に考えては罰でも当たりそうな本校生のすることは、それこそなんでも崇拜の種でした。後に「新栄女学校」と統合され、明治23年「女子学院」と校名が変更され、高等科は大正7年に東京女子大学設立の際に旧青山女子学院の一部と東洋英和女学校高等部とともにその一部となり、現在も女子学院は中学校と高等学校の一貫教育校として存在しています。

〈校風〉

矢島楫子は、生徒を人格ある一人の女性として認め、「あなたがたは自ら守ることができます。決して縛る必要などありません」と生徒を信頼し、細かい校則などはなく、外出も自由でした。

しかし、寄宿舎では起床も食事も時の鐘よりも一分も遅れることはできませんでした。少しでも遅れば、みなが揃っているところへ入っていくという、恥ずかしい思いをしなければならず、自然ときまりが身につきました。夕食が住むと、庭を散歩しながら編み物をしたり、談話をしたりして、自由な時間を過ごしました。

当時の桜井女学校の生徒は、「私は良妻になる」と自ら言ったり、「賢母」などと書いたりするのを恥じ、「私は将来独立して女学校を立てる」とか、あるいは「学者になる」とは言いましたが、「お嫁に行く」などということは話題になりませんでした。

〈学生として 先生として〉

この時代には、入学資格とか、先生の資格とかなどというなものはなく、英語は德子をふくめた高等科の生徒が授業をしました。赤い帯に、裾長の洋服、靴履きという当時もっともハイカラな装いで、下級生たちの憧れの対象でした。

ミセス・ツルーは、桜井女学校に限らず、看護婦養成所、独立女学校、養生園を経営し、宇都宮、前橋、高田などに女学校を創立しました。学校を創るとなると、基礎を整えるために卒業生や上級生を率いて教授に赴きました。

明治 21 年（1888）4 月に創立した高田女学校には、ミス・デビス、井上ちせ、小川とく（徳子）の 3 人で赴き、開校前の仮校舎で教え、本開業のための準備をしました。

（開校式は 5 月 19 日）

徳子は先生の仕事や与えられた任務を果たしながらも、自身の勉学も怠りなく、明治 22 年 6 月高等科を卒業しました。

その後もしばらくは先生を続けており、明治 27 年には、ヨーロッパから戻った豊田英雄を助け、中学校に相当する女学校「翠芳舎」（申請では各種学校）を創立し、そこでは裁縫と編み物を教えました。

〈慈善事業を楽しむ〉

桜井女学校には「自助栄恩社」という、宣教師たちの監督の下に本校の生徒だけが集まる会がありました。会はすべて英語で運営され、会長・書記・会計なども設けられていましたが、睦まじく、気の揃った会でした。毎週金曜日の午後講堂で開かれ、毛糸編み、レース、そのほかの手仕事をし、それを集めて何かの慈善事業に使いました。西洋の先生方が大きなかごの中へ、毛糸をたくさん入れて持ってこられ、各自の好みに応じて、靴下、手袋、肩掛けなどを編むための毛糸と編み棒を渡されました。そして、先生も生徒について編み物をしながら、英語での会話や簡易な本の読み聞かせなどをしました。出来上がったものは次の会に持っていくと、先生はこれを帳面に記入されて、他の新しい仕事を渡されるのでした。そしてクリスマス近くの会では、その手間代を渡され、その半分を事前箱に入れて他の半分を与えられました。

徳子は実に働き者で、いつも編み物をしていて皆も羨むほどでした。

日曜日には教師が生徒を率いて牛込拂方町の教会に赴き、上級生は他の教会に赴き奉仕しました。

〈東京婦人矯風会の設立～日本キリスト教婦人矯風会へ改称〉

夫の酒癖に泣かされ離婚した矢島楫子は婦人禁酒会に深い関心を寄せていました。

婦人矯風会は、明治 19 年（1886）11 月 9 日に婦人禁酒会の設立準備が東京虎の門の会堂で開催され大儀見よね子、三浦りう子をはじめ桜井女学校の関係者 4 名が発起人となり、集会 41 名参加者の中、多数の賛同を得て設立されました。さらに会則規約編成委員 7 名中 3 名も同女学校から選出されましたが、婦人宣教師の助言や指導が大きく作用していました。その後、議員の選出や規約作成等の基礎作りをへて、明治 19 年 12 月 6 日には、東京日本橋教会で東京婦人矯風会として発会式をあげ、初代会頭に矢島楫子が選出され、会員 56 名での出発でした。東京婦人矯風会は、明治 20 年に米国留学中の根本正を介して万国本部に設立を報告されました。

矯風会が発足して半年ほど経った頃、「この会は、世上の悪風を矯正して女権の拡張を望むとの主旨にて設立…」としながら、禁酒・禁煙、藝娼妓全廃論等々複数あるため、せっかくの会員の尽力が分散してしまい、損するところも多いとして、議員 10 余名が討論の末に「藝娼妓全廃」を第 1 の目的とすることになりました。明治 22 年に湯浅初子が元老院へ「一夫一婦の建白書」を提出しました。

その後も、運営は女子学院関係者が支え、明治 26 年（1893）4 月 3 日には東京靈南坂教会での第 1 回全国大会で全国組織が成立しました。名称を東京婦人矯風会から日本キリスト教婦人矯風会と改称し、会頭に矢島楫子、記録書記竹越竹代、通信書記根本とく（徳子）、会計下市小竹が就任しました（本部：東京の女子学院内）。

楫子にとって、日本から公娼を無くすことは悲願でした。

活発となった廢娼運動は、明治 22 年（1889）11 月 28 日、群馬県県議会が廢娼建議を可決しました。矯風会でも、明治 23 年（1890）3 月 8 日に、島田三郎、巖本善治らによる講演会を開き、その内容を小冊子として、初版千部は無料配布し、再版は四銭で領布しました。3 月 21 日には前橋で青年廢娼協議会が結成され、矯風会からは、潮田千勢子・佐々城豊寿が出席するなど各地でも高まりをみせましたが、その後の対策として、廢業した娼妓を引き受ける受け皿としての救済館が必要でした。

〈廢娼運動と女子慈愛館設立〉

仮に麻布市浜衛町 1 丁目の女子授産場で、彼女たちにいくらかの保護金をつけて職業教育を受けて、無月謝で和洋裁、和洋刺繡、編み物、和洋図画等を教え、生徒の作品から得た収入の半分を生徒に渡し、半分を運営にあてました。明治 27 年には女性救済のための「慈愛館」を設立する計画となり、スペンサー、キダー、ヤングマンら宣教師が協力して外国からも寄付を募ることにして、国内でも募金活動が始まりました。

矯風会は『婦人矯風雑誌』八号（6 月 2 日発行）の巻頭に「女子慈愛館設立趣意書」を、次号には「博愛なる諸兄姉に訴う」を掲載し、「府下大久保に適切な土地があるが所持金はわずか数百円にして地は 1,800 円を要す。我ら微力をあわれみこの挙を助け、多少に關わらず義援し給はば、ひとり我らのことのみにあらず」として義援金を募りました。取扱い所は、国民新聞、朝野新聞、毎日新聞、キリスト教新聞等でした。

資金面でたいへん苦労しましたが、なんとか土地を購入することができました。1,579坪、1,812円、南豊島郡大久保村中百人町356番地に土地を購入しました。7月2日の会議で本田貞子、原田さき子、根本とく子の3人を地主に選出し、地主が「土地所有者は矯風会である」という証文を入れ、手持ちの3百円に借受金の4百円を加えて7百円を支払った上で登記を済ませました。残金の千円は9月中に支払わなければならず、潮田千勢子が4百円、矢島楓子が3百円を立て替えたがまだ不足でした。在日西洋人有志者の530円、スペンサー遺族の百円、新聞記者の竹越竹代は募金を募るために名士の家を訪ねました。竹越は、日本で初めての女性記者ということで珍しがられ、3円5円と皆気持ちよく応じてくれたといいます。

その時徳子は、矯風会に月5円の寄附をしようと決心したようです。これらの資金は、貸家を数件立ててその家賃収入だと、切手の売りさばき許可を取って販売手数料をそれに当てました。土地を手に入れたものの建物は未だでした。とにかく事業を始めようと各家庭で娼妓に売られかけた子供を預かって家事を見習わせたりしながら慈愛館の開館を待ちました。婦人救済は相当苦労も多く、下着の世話までしなければならないような娘もいたのです。

楓子は矯風会の人たちとともに廃娼運動に取り組みながら、根源にある貧困を思わずにはいられませんでした。貧しいがゆえに娼妓に売られ、学校へも通えない…。社会から貧困をなくすことができないとしても、せめて子守学校をつくって子守をしている小さな子供たちに、教育を受けさせたなら、無知がゆえの転落を防げるのではと考え実行に移しました。

〈徳子にとっての婦人矯風会〉

明治23年9月に安藤太郎氏夫妻保証人として根本正と結婚する。根本正はアメリカ留学中から婦人禁酒会の事業に熱心で、アメリカの万国婦人禁酒会と東京の婦人矯風会との仲介役として尽力した。アメリカでの10年間の生活を終え、帰国するや廃娼や禁酒の運動を展開し、各地を遊説すると共に禁酒同盟の副会長ともなる。

根本正と結婚してからの徳子の矯風会への関わりは、多忙で留守がちな夫に代わって家を守り、子育てをしながら、目立って主義主張を訴えたりすることはなかったが、矯風会活動の第一目的である廃娼・女性救済の思いを消すことなく、自分ができること、しなければならないこと、をはっきりと自覚し、できることの喜びを胸に活動を続けた。

「両親の思い出」次女：角谷園予

『光をかけた人』より

母も誠に父にふさわしい妻でした。父の海外出張の留守手当で無駄遣いせず貸家を建て、根本家の経済の基を造りましたのも母です。家事に専心、外出といえば矯風会の為に出掛ける位でした。父が矯風会を日本に紹介した為だといつておりました。女子学院の寄宿に入り、外人教師の教育を受け、当時は日本女子の頭脳をためされた時代だと、同じ事は二度と聞き返す事が出来ぬ位だったそうです。私など、つい母を字引き代りにしてしまいました。讚美歌ぐらいは弾き、編物も上手で、父の毛糸の靴下は専ら母の手編み、私も模様入りの手袋を編んでもらっておりました。来客も多く、食事を出すこともありましたが、ありのままの御接待とし、お手伝いさんの面倒をよく見て、後々まで長くつきあっておりました。外人先生のおすすめで結婚式には鹿鳴館時代の洋装で、白い長い皮の手袋など見せてもらいましたが、台所に洗濯に節くれだちました母の手が昔はよく入ったものと思うほどでした。当時の御飯炊きは、今の電気釜の様な簡単なものではなく、人によって上手下手がありましたが、自分が炊くのが一番おいしいと、大きな木綿の前かけをかけ、お釜の前に坐り、火を入れていた母の姿は、今思いました本当に貴いものと存じます。しかし、一方、天長節の夜会にお招きを受け、外出致しました姿もなかなか上品なものでした。

「祖母根本徳子のこと」孫：根本正廣

矯風会機関紙『婦人新報』より

絶えず控え目で、祖父の陰の力であった徳子も、家の中では支柱でありました。しかし、家の者を誉めることはあっても叱った姿などは全く見たことはありませんでした。家には数人のお手伝いさんがおりましたが、若いころ教育者であったせいいか、家事・行儀を躊躇たほか、教養としてお茶やお花等を学ばせておりました。教鞭をとっていた祖母のノートを何冊か見たことがあります、今でいえばペン習字のように、正確で美しい文字が最後まで書かれておりました。一家ではただ一枚だけあった、わが家では貴重な羽布団を祖父が使用しておりました。睡眠の時ぐらいは世間から解放してあげたいという祖母の思いやりだったのであります。常に何かをして手を休めようとしなかった祖母が、私の母伊代子たちのために、極細の毛糸で縄編み模様の手袋を編んでいる姿を見た時などの器用で大変几帳面な祖母の仕事振りは今でもはっきり記憶しております。祖母が使用していた箪笥の中に、何段にも分けて雑巾がしまっていました。それは解いた着物の糸で縫ったものであったと母から聞かされたことがあります。

宮尾登美子 芸娼妓の世界

初期、中期の代表作である『櫂』や、『春燈』、『岩伍覚え書』が、肉親であるからこそ愛憎激しい親子の葛藤を描き、『陽暉樓』や『鬼龍院花子の生涯』が、実家（実父）の職業であった“女衒”に関わる世界の男女の浮き沈みを描いたものです。

『櫂』では宮尾自身がモデルの綾子が、小学校を卒業する頃までの少女期が描かれています。

『岩伍覚え書』より

十五という歳の嫁入りは廻りを見渡してもべつに早いことはないものの、母の梅も兄の楠喜も決して進んでおらず、喜和ひとりが弾んでいることの大きな理由は、当の岩伍が仕事らしい仕事を持たず、渡世人のような暮しかたをしている事にあった。喜和はこの夏、お多賀様の夏祭で、十人抜きの青年相撲にひとり勝ち抜いている岩伍を見て以来、自分は岩伍と夫婦になるものと思い決めてしまっていた。何故そう決めたのか、と訊かれても答えようがないほどの、まるで子供染みた一途な思い込み様で、十五年間、母にも兄にも逆らわず、何事のいい張りもせず、世間とも殆ど交際いのなかつた喜和が生れて初めて、「心にこうと決めた事」は必ずそうするべきものだし、そうなるべきものと信じ切っていて疑いもしないのであった。

私、高知市緑町を皮切りに、海岸通り、納屋堀にてもう彼は四十年近く芸娼妓紹介業を相當んでまいりましたもので、姓名を富田岩伍と申します。私の仕事の内容は表の看板を読んで字のごとく、妓供たちを遊廓、料理屋に周旋するものであります、…私生來の気質から日頃関係者以外の人の世話なども引受けておりまして、殊に緑町時代は町内会長、消防団長、青年団長、皆一人で荷を抱えていたもので御座います。それ故話はしばしば商売の中心から遠く外れてしまう趣となる場合もありましょうが、私に云わすれば、紹介人の仕事は、これ悉く貧困、暴力、犯罪など常に世の悪と密着しておりますところから、営業上これを避けて通る事はまず不可能であります。もっとも、絡れ事の嫌いな、どちらかと云えば臆病な人間は最初っからこう云う仕事は買うて出ません故、おのがじしと云われればそれ迄の事ですが、私も顧みてこの四十年間には…上・下、いくたびかの危険と、固く縛れて出口も見えぬ面倒な揉め事のなかに身を曝してまいりました。こんにち私も六十と云う年勾配と相成り、なお元氣で営業いたしておりますものの、ときに昔話のひとつもふと口に載せたくなる折も御座います。…

…私、今までいささか自慢しておりますのは、本人の前借に余程余裕のある場合を別にして、よんどころない身売の妓供からは、手数料は一銭たりとももらってはおりません。手数料の建前は前借金の一割であります、この一割を七三で抱え主と妓供が負担する仕組みになっておりますが、妓供からのもらい分を辞退するとなると収入は三分減と相成ります。これでは営業が成立たぬかも知れませんが、もともと女の身売は親の貧乏を救済するための、子の善行から出た事であります故、少しでも本人の取分を多くしてやるのが、この仕事を思い立った私の願いと云うもので御座います。かたわら、私のこう云う気質を呑み込んでくれている楼主の方たちからは、規定の七分以上、

多いときには二割もの割増など頂戴し、このほうは遠慮を外して甘えさせていただいて居ります。…

…今は昔と違つて県の議会にも廃娼運動を唱える議員なども現われ、学問のある連中はまるで流行り病いの疧言のように同じ事を唱えておりますが、私に云わせて貰えば、まず裏町の貧乏人が楽に暮せる世の中にしてからそう云う理想をぶつて欲しいものであります。私とて芸妓娼妓が決していい職業だとは思っておりませんが、高知市の貧民窟と具さに関わりあった経験のある人間なら、この実状のなかで廃娼運動を唱えるのは、貧乏人は皆首を縊って死ね、と云うに等しい事がお判りで御座いましょう。彼等の目標は、女たちを搾取とやらしている雇い主を撲滅する事にあると云うのも判りますが、雇い主とて鬼のような人間ばかりとは限らず、借金地獄に喘いでいる者に取っては仮とも思える場合もあるので御座います。私、くどうは御座いますが、人様から卑しめられるとは知りながらこう云う職につきましたのも、いささか考えるところが御座います故で、それは家のため親のため止むなく身を落す女達に少しでもいい条件が当りますよう、かつは阿漕な雇い主の監視と云う考えも加わっておりまして、及ばずながら今日まで非力の腕を振つてまいりました。私のこの仕事への打込みかたは、世間普通の人様が己の職業を大事にするのと少しも変らず、ときと場合によつては命を張つてもとまで心を決めておりますが、それだけに足抜きなどと云う鄙劣な行動は許せないのであります。廃娼運動を唱えておる人の全てがそうとは申しませんが、中には足抜きを暗に勧めている者もあるやと聞き、また稀に、組織の男たちが手を貸して逃走を助けた話などに接しますと、この人達は人間の義理とか責務とかの大変なものはどう考えておるのか、それを聞いてみたくなります。身売と云えども貸借関係が成立すれば世の通常の債権債務の間柄と全く同じものでありますものの、しかし念のため申上げておきますと、いったん契約の上は前借返済までどんな苛酷な条件でも耐え通さればならぬかと云えばこれには「自由廃業」と云う手があり、警察に駆込み訴えして調査してもらった上、妓供の云い分が正しければ前借棒引で全くの自由の身となる事も出来るので御座います。妓供を抱えるについては楼主側にも、一、妊娠六ヶ月後ヨリ分娩モシクハ流産後二ヶ月ヲ経過セザル娼妓ヲシテ稼業セシメザルコトとか、一、医師ノ診断書ニ依ル病氣療養期間中、娼妓ヲシテ稼業セシメザルコトとか、一、客ノ遊興費ハ之ヲ娼妓ニ代弁セシメザルコトとか、その他娼妓保護のためのさまざまな細則が法制化されており、楼主が法通り行わなかった場合、妓供の訴えが通るのであります。つまり、芸妓の鑑札一枚しかない妓に向かって楼主が客を取る行為を強要したりするときは、これは堂々と断ればいい訳で、私とて筋の通った自由廃業については大いに賛成するところで御座います。

〈参考1〉

明治期の日本におけるプロテスタント・キリスト教宣教

キリスト教が生まれる母胎となったのはユダヤ教です。ナザレの村の大工の息子イエスはユダヤ教徒であり、ユダヤ教の教師でした。このイエスこそが待ち望んでいたメシア（救い主）であると信じ、「イエスこそキリスト（メシアのギリシャ語訳）である」と告白した者たちが、キリスト者と呼ばれるようになったのです。キリスト教は、ローマ帝国によるエルサレム神殿攻略の後、ユダヤ教から生み出され、パレスチナから地中海世界に広がって行き、それぞれの歴史的・地理的背景の違いから、西方教会と東方教会、ローマ・カトリック教会や聖公会（英國国教会）、さらにプロテスタント諸教会が生み出されました。

プロテスタント諸教会にはそれぞれ歴史的・政治的・地理的背景の違いから特徴を持った多くの教派がありますが、いずれも、16世紀の宗教改革に源流を発しています。

明治期日本におけるキリスト教宣教について：「バンド」の形成

明治6年（1873年）に行われた「吉利支丹及び邪宗門の禁令」の高札撤去後に、各地でキリスト教伝道運動が開始されました。「熊本バンド」や「横浜バンド」、「札幌バンド」と呼ばれるグループは日本プロテスクト史の源流であると言われています。

※ バンド（band）は集団、一団などの意。

1) 「熊本バンド」

日本組合基督教会の支柱とも言うべき集団で、熊本洋学校の教師ジェーンズの感化を受けた学生たちが、明治9年「奉教趣意書」に署名したことに始まっています。なかでも京都の同志社を明治12年に卒業した小崎弘道、宮川経輝、海老名彈正、横井時雄、金森通倫、山崎為徳、浮田和民、不破唯次郎などの第1期生（15人）は全員が熊本洋学校の卒業生でした。

彼らは新島襄の同志社創立（明治7年）、日本組合基督教会の成立、学校活動など、近代日本の歴史を開拓させる起爆剤となりました。中には、海外の宣教団体からの経済的独立を強く主張する者も少なくなく、『六合雑誌』『新人』『基督教新聞』などの基督教系メディアで活躍するものが多くいました。

2) 「横浜バンド」

明治5年バラの指導により、「バラ塾」で学ぶ学生を中心として居留地に設けたプロテスタントの集団をいいます。当時、横浜は西洋文明の中心地で宣教師について英語を学ぶものが多くいました。バラ塾の学生たちは、新年初週祈祷会に参加し、バラの熱心な説教に応答して、同年3月、11名が洗礼を受け日本基督公会を設立しました。この公会は外国のどの教派にも所属しない無教派の福音主義信仰に立ったものでした。メンバーの多くは、S.R.ブラウンの「ブラウン塾」に入塾して英学や神学を学びました。やがて、日本のキリスト教会の指導者となり、教育界、政治の分野などで活躍しました。押川方義、本多庸一、井深梶之助、植村正久などは代表的人物です。

3) 「札幌バンド」

アメリカ人教育者 W. S. クラークらの感化を受け、明治 10 年「イエスを信ずるものとの契約」に署名し入信して教会を形成した札幌農学校の学生たち 15 名（翌年さらに 18 名が署名）の集団をさします。中心となったのは、大島正健、伊藤一隆、内村鑑三らで、明治 14 年札幌教会を設立しました。このうち内村、新渡戸稻造、宮部金吾らはメソジスト監督教会の宣教師ハリスより洗礼を受けました。日本プロテスタント宣教の源流の一つとしての「札幌バンド」の評価は、北海道地方への影響以上に、内村鑑三から発する無教派主義、および内村や新渡戸のもつ幅広い影響に負うところが多のです。「札幌バンド」は、同じ農学校学生であるという結束の契機をもち、クラークの自発的な伝道を受け継ぎ盛んな平信徒伝道を行いました。札幌唯一のプロテスタント教会を形成し無教派主義を選択しました。

築地バンド(長老派)／神戸バンド(会衆派)／阪神バンド(会衆派)／弘前バンド／静岡バンド(メソジスト、カナダ・メソジスト教会)／松江バンド(きよめ派、日本伝道隊)／松山バンド(会衆派、同志社)／鳥取バンド(会衆派)／ホーリネス・バンド

根本徳子簡略年表

	根 本 正	徳 子	備 考
弘化3年 (1846)		桜任蔵35歳 石黒春子29歳と結婚	
嘉永元年 (1848)		春子：長男申太郎を出産	
嘉永2年 (1849)		長女：静子を出産 (春子の伯母浅井夫妻に預ける)	
嘉永4年 (1851)	10月7日 根本正誕生(常陸国東木倉村)		
安政5年 (1858)		10月 任蔵 江戸を脱して西上 春子は静子(9才)を浅井夫妻に預けたまま、 申太郎を連れて、小沼秀美(鹿島郡)宅へ →安政の大獄直後 大洗逗留	
安政6年 (1859)		庄屋大森道義の家に預託(御前山村長倉)	
文久元年 (1861)		春子46才 長倉大森家で病歿 [静子13才]	
文久3年 (1863)	豊田天功の家僕となる(12才)	申太郎、静子 藤田健に引き取られる。	
慶応2年 (1866)		春雄(申太郎)：(舟)恒子と結婚 静子：(豊田天功門人)小川忠次郎に嫁す	6月9日 小太郎：渡井量蔵、加藤木賀三、 関直之介らと脱藩し、江戸へ行く
慶応3年 (1867)	水戸藩南御郡方の役人となる(16才)	4月17日 徳子誕生	
慶応2年 (1867)		小川忠次郎歿	
明治元年 (1868)		7月 静子20才 小川の遺言により(同門の) 関直(関直之介)に嫁す	
明治4年 (1871)	上京 藤田健宅に仮寓 三叉学者に学ぶ(20才)	維新後 関直と春雄は、宮内省に出仕する (静子、関直との間に、一男一女を出産)	
明治5年 (1872)	中村正直の私塾に入る(21才) 警視庁巡査になる		
明治6年 (1873)			中村正直同人社開校
明治7年 (1874)	駅遞寮の雇いになる(23才) 立川弘毅とともに小太郎の仮葬を京都本圓寺支院に改葬		
明治8年 (1875)	同人社を退学 神戸局に雇いとして赴任		
明治10年 (1877)	横浜局に転任 判任官となる ヘボン塾、バラ塾で学ぶ		11月27日東京女子師範学校正式開業
明治11年 (1878)	受洗		
明治12年 (1879)	3月 渡米(27才) 4月 オークランド市の小学校に入学 カリフォルニア州弁護士パラスト一家で働く		
明治13年 (1880)			4月桜井女学校 幼稚園を開園
明治14年 (1881)	ホブキンス中学校に入学(29才)	8月 徳子 女学院へ入学	
明治18年 (1885)	バーモント大学に入学(33才)		
明治19年 (1886)		静子歿 38才	
明治20年 (1887)			豊田美雄：10月旧藩主徳川秀敬イタリア全権公使 総子夫人のお相手役として随行
明治22年 (1889)	6月26日 バーモント大学卒業 9月～10月英独伊を歴訪 (国会議員、名士らと会う)	6月 徳子 女学院全科を卒業。 同校附属小学校で教鞭をとる 12月～ 姉妹校の高田女学校で教員を務める	8月西フランス 12月12日総子夫人とその長男に率い帰國 (根本正も同行)

	根本正	徳子	備考
明治23年 (1890)	1月 帰国 3月29日東京禁酒会設立 9月 正と徳子 結婚 (媒酌人:豊田英雄、保証人:安藤太郎夫妻) 新居:芝の琴平町3番地	8月 同校退職	
明治23年 (1890)	11月東京禁酒会 会長:安藤太郎 副会長:根本正		
明治24年 (1891)	5月23日 長男美倫誕生		
明治26年 (1893)	7月7日 移民調査のため墨西哥へ出発		
明治27年 (1894)	7月16日 中南米視察に出発	4月 豊田英雄「翠芳学舎」開校 (麹町区有楽町1丁目5番地) 申請書に徳子の名前あり(正規申請は8月30日) 10月11日 東京知事から認可「翠芳舎」の命名は藤田健 徳子の受け持ちは裁縫と編み物	
明治28年 (1895)	3月6日 中南米視察から帰国 バーモント大学へ	翠芳学舎開校	豊田英雄:4月宇都宮高等女学校兼栃木県 尋常師範学校教諭兼任
明治29年 (1896)	7月4日 北米・中南米商工業視察に出発		
明治31年 (1898)	3月15日 第5回総選挙に自由党から立候補 初当選(46才5ヶ月)		
明治32年 (1899)	2月15日根本正国民教育授業料全廃建議案可決 5月 インド、ビルマの商工業視察 12月6日未成年者喫煙禁止法案可決		
明治35年 (1902)			8月10日桑原政:衆議院議員当選
明治36年 (1903)			豊田英雄 4月茨城県女子師範学校舍監 8月茨城県立水戸高等女学校教諭 兼茨城県女子師範学校教諭の辞令
明治39年 (1906)	公立幼稚園保母に恩給を与える法案成立		日本キリスト教幼稚園連盟創立
明治42年 (1909)	8月26日 長男 美倫 残		
明治44年 (1911)	9月7日 次男 正次 残		
明治45年 大正元年 (1912)			桑原政:残 豊田英雄 4月茨城女子師範学校舍監解職
大正6年 (1917)		3月27日 春雄 残	5月水戸高等女子学校講師嘱託
大正10年 (1921)	9月 中国、満洲、朝鮮を視察		
大正11年 (1922)	関東大震災で被害にあう		4月水戸高等女学校講師解職
大正13年 (1924)	5月10日 政界引退		
大正14年 (1925)			大成女学校の校長となる
昭和2年 (1927)			大成女学校退職
昭和8年 (1933)	1月5日 自宅にて歿(81才)		
昭和10年 (1953)			小太郎の墓を京都より常磐共有墓地に移す
昭和16年 (1941)			近親者に看取られ自宅にて歿
昭和18年 (1943)		11月30日 徳子歿	

司書さんのおすすめ



市立図書館は、子どもから大人まで、すべての人の「知りたい」「学びたい」を支援しています。新しい本や情報と出会う架け橋となるようさまざまなジャンルの資料を収集していますので、気軽に立ち寄りください。

・手のひら静脈認証システム



手のひらを装置にかざすことで、利用カードがなくても資料を借りることができます。ぜひお試しください。

・蔵書冊数は22万冊

人気の話題作や文学小説、児童書、手芸、ビジネス書のほか、CD、DVD、新聞や雑誌など、豊富な情報発信に努めています。

・調べもの相談に乗ります

皆さんからの相談に応じて資料を紹介し、適切な資料にたどり着けるようサポートしています。

市立図書館 029-352-1177

まるぽちゃおまわりさん



まるぽちゃおまわりさんは、その名の通り、小さくて太ったおまわりさんです。小さくて太っているけれど、真夜中に泥棒さがしもするし、交通整理は上手だし、海で人助けもする、優しくて頼もしいおまわりさんです。

この絵本では、そんなまるぽちゃおまわりさんが大活躍するおはなしが3つ読みます。分かりやすい文とカラフルで温かみのある絵で、いきいきと描かれたまるぽちゃおまわりさんの世界を、どうぞお楽しみください。



優しくて頼もしい
おまわりさんが大活躍！

根本正物語 根本正生誕150周年記念

「根本正」は、明治・大正時代に活躍した衆議院議員で、那珂市の偉人の1人です。

庄屋を務める農家の次男として、那珂郡東木倉村（現那珂市）に生まれた「根本正」は、28歳のときにアメリカに渡り、10年間政治学を学び、47歳のときに衆議院議員に初当選しました。73歳までの26年間を衆議院議員として、健全な青少年・国民の育成（義務教育の無償化・未成年者喫煙禁止

法、未成年者飲酒禁止法の成立など）に力を注ぎました。また、水郡線の開通など地域への貢献も深く、この本を読めば、「根本正」の功績と人となりが分かります。那珂市の偉人の物語をおすすめします。



那珂市の偉人の物語

編集後記

災害的新型コロナ禍の為、8／29（日）顕彰フェスティバルは中止、来年度の同時期に再度協議をして実施することになりました。

水郡線の全面開通に貢献した根本正、ゆかりの地を訪ねる旅、9月26（日）は中止、感染拡大の状況により来年度内実施を考慮することにしました。

行事委員としては大変残念です。予定していたゆかりの地について由来を紹介しておきたいと思います。

1 常陸太官市（旧山方町）

人口 5,429人

山方村について「旧山方村は西野内、舟生（入）と共に岩井村（磐井）といった。応永15年（1408）関東管領上杉氏の子、義憲が佐竹13代継いだ時守り役として、美濃山方（岐阜県山県市）から入った上杉一族の山方能登守盛利が居城し、この地を山方と称した。

2 大子町

人口 15,744人

大子町の諏訪神社神官でもあった田村賢考が命名。小久慈の湧き水が「諸白と呼ばれる清酒に似て濃厚で甘味のある汁、「醍醐」（だいご）のようだったから。（牛乳、羊乳から製した食味、だいご味）

3 堀町

人口 8,397人

初めは常陸佐竹領、慶長7年（1602）秋田転封により徳川幕府領（天領）となり元和8年（1622）には棚倉藩領となって享保14年（1729）には堀村に陸奥国代官所、堀陣屋が設置されて幕府領奥州白川郡堀6万石は堀代官の支配となる。

- 新型コロナが収束することを願い、来年度にむけ顕彰会活動が正常に出来ますよう会報98号をお届けします。

参考

平成27年いばらき観光マイスターガイド。人口 令和3年9月1日現在

（海老根敬 記）